

養豚業者ら移動販売

豚コレラにもコロナにも勝つ！

豊田でにぎわう



商品を購入したお客にあいさつする鋤柄雄一さん
(23日午後、愛知県豊田市で)＝中根新太郎撮影

家畜伝染病「CSF(豚熱)豚コレラ」による全頭処分からの復活を目指す愛知県豊田市の養豚業者が23日、新型コロナウイルスの影響で苦境に陥っている取引先の精肉店や仲間の農家らと一緒に同市内でドライブスルー方式の「マルシェ」(市場)を開き、大勢の来客でにぎわった。主催者の一人で、養豚会

社「トヨタファーム」を営む鋤柄雄一さん(50)は、きめ細やかで軟らかい肉質が特徴のブランド豚「三州豚」を生産していたが、昨年2月、CSFが発生し、全7231頭を殺処分した。7月に営業を再開したが、飼育には時間を要し、先月ようやく40頭を出荷。CSF以前の水準(月2000〜3000頭)に戻るには、あと2年はかかる見込みという。

そんな中、出荷先だった豊橋市の「鳥市精肉店」が新型コロナウイルスで売り上げが7割減に落ち込んでいると知った。同店はレストランやホテルなど外食産業の取引先が多く、外出自粛や休業要請の影響が大きかった。そこで、鋤柄さんは自社のキッチンカーを同店に無償で貸し出すなどして、先月から始まった移動販売を支援している。

今回のマルシェは、三州豚のブランド復活も目指して、交流のある三河地方の農家にも声を掛けて企画した。豊田スタジアムの駐車場を借り切り、地元産の豚肉や牛肉のセットや、野菜のセットなどを段ボール箱に詰めて販売した。

マスクを着けた精肉店の社員らが、続々訪れる車から注文を受け、商品を後部座席やトランクに運んでいた。同店経営者の市川勝丸さん(38)は「店の冷蔵庫は売れ残った肉でいっぱいになる一方、家庭での需要は高まっていた。こういう形で売れたのはありがたかった」と話す。

鋤柄さんは「SNSなどできょうのマルシェを知って来てくれた知り合いもいた。復活への第一歩。ほかの養豚農家の励みにもなれば」と意気込んでいた。

この日は6時間で263台の車が訪れ、用意した肉や野菜約400セットが売れたという。同スタジアムでの販売は30日、6月6日も行う予定だ。